

本音の ココマル



吉祥寺のココモルシアターで「獄友」(金聖雄監督)を見てきた。冤罪(えんざい)をテーマとしたドキュメンタリー映画。軸になるのは、同じ体験をした者同士の友情である。

みやこ
宮子 あずさ

カルなどを題材とした作品もある。後者の作品には、ダウン症者である夫の弟が出演している。そんなご縁から、誠実な作品作りについては、夫の家族から聞いていた。

私が「獄友」に共感したのは、選ぶ余地なく与えられた状況を、自らが選んだかのように、〈明るく〉生きる人の姿であった。民族や性別、障がいの有無。これもまた選びようがない。

石川一雄さん(狭山事件)、袴田巖さん(袴田事件)、桜井昌司さんと故杉山卓男さん(布川事件)、菅家利和さん(足利事件)の獄中生活は、合計百五十五年に及ぶ。無実の罪で人生の大半を獄中で過ごす不運を、五人はどう受けとめたのか。それぞれの物語が、繊細に描かれていく。

獄友

金監督には、冤罪事件の他、在日韓国・朝鮮人一世の女性の暮らしや、知的障がい者のミュージ

もちろん冤罪はあってはならないし、明るくあれと人から求められるいわれもない。しかし、人生の全てを選べる訳ではない以上、本意でない状況は起こりうる。その時私たちはどのように生きていけば良いのだろうか。

金監督が描く〈明るさ〉はその実存的な問いへのヒントになるはずだ。

(看護師)